

大変丁寧なご紹介をいただきまして、聴きながら、「あ、しまった」と汗が噴き出るような思いがしてい
 5 たんですが、プロフィール——どこかに出したプロフィールをそのまま(笑)、忙しきにかまけて送ってし
 まって——四国との関連が全く抜けているプロフィールであったということ、本当に申し訳なく思いま
 した。私は四国に育てられた者です。昨日来考えておりますが、私今年「五十」になりますけれども、ま
 だ私、四国教区が一番長いです。17年四国教区に関連しておりました。まだ三多摩教区はそこに及ばない
 10 ですので、四国に育てられた者というふうに申し上げて良いと思いますし、これは、本当に正直言
 います。ほんとうに、四国に育てられたと思っています。ただ、今日はちょっと、私の半
 ズボン、漢垂れ姿を知っている人がいるんじゃないかと思って(笑)、なあーんとなくやりにくい気分では
 15 いるのは確かなんですけれども、皆さんにと思います。「済美会館が会場である」と聞きました。これはもう思
 い出話を始めるともうそれだけで終わっちゃいそうなんですけれども、「済美会館」というと、安井先生に
 聞きましたら、やっぱり場所、移っているんですね。私の記憶にあるのは、もう、ほぼ40数年前だと思
 15 いますけれども、もっと街の中にありました。商店街の中に隣接するような形だったかな、ちょっと定か
 じゃありませんけれども、もっと街の中にあつた記憶があります。そこでの聖会も思い起こしますし、ある
 いは「イワゼキヒル」って——今でもあるんでしょうか——あ、もうない。「イワゼキヒル」っていうと
 20 ろでやった...あそこは、大きいお風呂があつてですね、何よりもあそこが会場になると牧師の子どもた
 ちの楽しみは、もう、貸し切りのお風呂で、プールのように泳ぐこと、でありまして(笑)。安井先生のと
 ころのお子さんたちもそうでありまして、あるいは今、河野先生たちの、今はもう、どこかの大学の先生を
 20 しておられますけれども、河野克也、なんていうのも(笑)、——もう呼び捨てですけれど(笑)——一緒に泳
 ぎたくちであります。思い出します。田んぼの中にあつまして、田んぼに水を張る時期で、田んぼの水の
 道を経たらずらで変えたらもうこっぴどく叱られたことを(笑)、昨日のように思い起こしますけれども、そんな
 25 ことで、何か、こう、とても懐かしい、気分で、ここにおります。
 そのように、まあ「誇り」と申し上げましたけれども、それは「聖会体験」ですね。傍で遊びながら、
 そのように遊びながら、しかし、大人たちがほんとに大切なものに向き合っているっていうことを肌身に
 感じておりました。そういう空気っていうか、雰囲気——「雰囲気」って昔はあんまり好きじゃない言葉
 30 でしたけれども、このごろは「雰囲気」って大切だなと思いますけれども——そういう雰囲気の中で育つ
 たというふうに思います。まだ、青野雪江先生がお元気でいらっしゃいました。聖会のたびに出て来られ
 30 まして、聖会の時の私の楽しみは、父が青野先生とご挨拶をしている時に、そおと近くに寄っていく
 んですね。何するかっていうと、子どもですから、背がだんだん青野先生を抜かせそうだなという(笑)、気分
 がしてきまして、「そろそろ抜かせたかな？」と半年に一回くらい立つんですね。「初めて大人を抜かした」
 35 っていう(笑)。「背」が大人を抜かしてっていうのは青野先生で体験したんですけれども(笑)、そんなこと
 をしながら、それはまあ、冗談のようなことですが、青野先生が培われた一つの「雰囲気」という
 35 ものがあつたように思います。その後、青野先生がどんなに、あの小さなお婆さんですけれども、どんな
 に大きな存在であつたかというのは、その後、ひしひしと分かるようなことでありまして、そのような流
 れの中にあるこの聖会に招かれて今日は…。昨日も八王子の礼拝が終わってから来ましたけれども、「みな
 40 さん、お祈りください。大変緊張しております」と(笑)、いいながら出てきましたけれども、そのような中
 にあるところに立つ。「私のような者で...」という思いが本当のところ、するような思いがいたします。そ
 れは言い換えてみれば、その当時の「聖会」というのは、ある種の「勢い」と言ったらいいでしょうか、
 「力」と言ったらいいでしょうか、「変化を生み出す力」と言ったらいいかもしれません。「変化を生み出

す力」です。そこに出たら何か、こう、圧倒的なものに出会って、そして本当に生活が変えられていくというようなそういう「力」、「雰囲気」といったものを子どもながらに感じて、そのうちに自分も聖会に出るようになって、そういう中で育てられたわけであります。聖会は言うてみれば、初めからそういう信仰に変化を与えるべく行われてきたものであります。まあ、信仰そのものが変化を与えられるべくあると言

5 ってもいいんですけども、聖会はもう、ひたすらそれに集中していると言っても良いことでしょう。

中田重治のホーリネス運動の「聖別会」というものに我々の「聖会」のルーツを見ることができでしょう。その中田重治のホーリネス運動というのは、主の日の午後に行われたわけです、最初。それは、普段の信仰生活に——まあ、礼拝に飽き足らず、といういい方は私あまりしたくない気はするんですけども、しかし敢えて言うならば——礼拝に飽き足らずに、その礼拝を刷新していくような、霊的に刷新していくようなそういうことのために中田重治がホーリネス運動を推し進めていった。信仰に変化を与えようとしたんです。明らかな変化を与えようとしたわけです。というのは、当時の信仰というのはある意味では、まあ、罪が赦されて良かった、というそこ止まりの信仰。真面目な信仰と言えればせいぜい、正直に自分の罪を泣く、「私って罪人ね、でもイエスキリストが赦してくださるから…」なんていうところを堂々巡りしているような信仰。そういうものの信仰を中田重治は「偽り」だと、そう考えたわけです。そうではなく、

10 15 15 本当に信仰を持ったら罪深い姿に勝てるはずだ、そう考えたわけです。その生き方に神のいのちが食い込んでくるような、神のいのちが食い込んだら生き方が変わってしまうような、そういうことがあるのだ、ということ、声をからすようにして語り続けた。そこに、我々の教団は生まれました。大切なことだと思います。

今朝の聖書もハッキリそう言います。聞き逃してはなりません。「罪を犯さないようになるため」。罪を

20 犯さないようになるため。ヨハネは真剣にそう考えていたのです。「信仰を持ったら罪を犯さないようになる。」という変化をヨハネは、ある意味では、信仰を持ったら当然起こることだと考えているのです。我々の「きよめ」と言っていていいでしょう。そのままそう言って間違いないでしょう。信仰を持ったら罪を犯さなくなる。これは、信仰的に優れた一部の人がたどりつく境地、高みではありません。そうではなく、我々はみんな罪に勝つんです。ハッキリ申し上げますと、今日ここにいるひとり残らず罪に勝つんです。ここ

25 25 にいながら、罪に勝つんです。ヨハネはそう信じていますし、私どもにもそう信じるように促しております。私どもが洗礼を受けたということ、私どもが主イエス・キリストを信じ、信仰の告白をし、洗礼を受けたというのはそれほどのこと、それほどのことです。みんな洗礼を受けたら罪に勝てるようになります。キリストに救われた者はみんな罪に勝つ。

なぜか？というのも、そのすぐあとに書きます。「罪を犯さないようになるためである。もし罪を犯す者があれば」と書く。なぜ罪を犯す、いや、犯さなくなるのかといえば、「罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」...ひとつのこと、いや二つぐらいのことが書いてありますが、一つのこと「罪を犯す者がある」という事実でしょう。それに対して「助け主キリストがいる」ということでしょう。そうなりますと、これは大変面白いと思いますが、罪を犯さなくなる、というのは、ま、日本語にもそのことは現れておりますけれども、一つの、力に

30 35 35 満ちた過程であります。プロセスです。力に満ちた一つのプロセスです。だから、完全無欠の罪のない状態がすぐにそこに現れてくるわけではない、っていうのを知っているから、「罪を犯す者があれば」と言うんです、そのすぐ後に。もう、ここから出ていく時にみんな罪がなくなって、まあ青空、雲一つない青空の中に行くような、「もう、罪なんていったいどこへいったんだらう」なんて、そんな言い方でここを出ていくことができるというわけではない。「罪を犯す者がある」という現実があるんです。我々は罪を

40 40 犯しながら生きるというところがあるんです。「罪を犯すことがあっても」という…。しかし、ヨハネの中心はそこではありません。罪を犯す者がある、そりゃそうだろう、完全無欠のキリスト者なんて生まれよ

うもない。しかし、ヨハネが言いたいのはこのこと、それにまさる大きな力がある、助け主がおられる、ということ。だから、小さな罪を抱えていても大丈夫、心配するなど、そう言うのです。

「助け主」というのは、ふつう、ヨハネの言い方ではこれは「聖霊」のことを意味いたします。しかしここでは踏み込んでいます。ここでは踏み込んでハッキリこう言います。「わたしたちのために助け主、すなわち義なるキリスト」。義なるキリスト！この助け主を信じれば、罪を犯す者があつたとしても大丈夫、

5 5 10 15 20 25 30 35 40

って言うんです。

この「助け主」はどれほど大きいかということヨハネはここで書きます。こういう書き方をするんです。いったいどこまでこの人はその大きさをとらえていただろうと思えますけれども、「ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。」全世界の罪、1世紀のヨハネの教会に来ていない全世界の罪を義として余りある力があるじゃないか、それが本当の我々の姿だ、そうですね皆さん、考えてください。皆さんは罪を抱えて悩んでいるかもしれません。きよめ、きよめと言ったって実際正直に問えば、ああここにも罪が残ってる、罪が残ってる、そしてまた来年もやり直しだ、なんて、そんな考え方を

15 20 25 30 35 40

するかもしれません。しかし、もっと重要なことは、それは、我々がすでにキリストと共に生きているということです。そのキリストは我々の罪に対して義とする力をグッとかけている。それをヨハネは1世紀の教会だけじゃない、「全世界の罪」その贖いのため。ですからこう言っているんです。今日、ここに、「全世界」ですから、松山にも来る。松山にも「助け主」、義とするキリストのその力が一人一人にグッとかけられているんです。ある意味では罪に悩んでここに来られたかもしれません。しかし、忘れないでいただきたい。本当の姿は、私どもはすでにキリストと一緒に生きているんです。そのキリストが、その罪に力をグッとかけて義としようとしておられるということが、本当のここでの姿。ですから、そのキリストの前に、「いやいや、まだ罪が残っていますから、私はダメなキリスト者かも知れない、すごい立派なキリスト者がいれば、自分は正直に問えば、まあ、ペーパーのキリスト者です、まあ何とか天国の隅っこのほうに（苦笑）残れるかも知れないけれども...しかしペーパーのキリスト者です」、そう言ってみるとすると、どうですか。これ、イエスさまに対して失礼ですよ。イエスさまは、私どもをいのちがけでとらえてグッと神の国の真ん中に引っ張ってこられたんです。それなのに、「イエスさま、私、隅っこのほうにいるんです」っていうのは、「じゃあ、わたしの力が足りないって言うのか？」そう問われることです。「わたしはあなたを贖った。」ここに贖い、贖いの供え物...2節のところに出てきます。贖いの供え物は一つである。十字架を意味しているでしょう。いのちがけの贖いの供え物です。

それともう一つ、「贖い」というのは、旧約聖書の考え方を辿っていけば「神のものとして買い戻す」っていうことです。旧約聖書をよく読んでいらっしゃる方は「ホセア書」っていうのをご存知でしょう、ホセア書。罪を犯した妻を一生懸命買い取って自分のもとに戻そうとする預言者ホセア。そしてホセアに言うんです。「これが、わたしの姿だ」...一生懸命買い戻そうとする神のお姿、キリストのお姿。それなのに、「神さま、あなたの買い戻すわざはそこまで無い、私はこの辺で十分です、そこまでの力は持っていません」って言っていることと一緒になんです。みなさんがご自分の罪を信じてしまつて、罪の姿を信じてしまつて、どうせやり直しをやっているペーパーのキリスト者だなんて思わないでください。胸を張っていただきたい。一人一人手を抜かずに義なるキリストがみなさんに義とする力をかけておられる...。一人一人です。「全世界の」と言うのですから。

ですから、私どもはいったいどっちを信じるのかということをお問わなくてはなりません。みなさんは、自分の罪深さがこんなに根強く確かだということをお信じるのでしょうか。そう信じる場所は掘り出せばあるでしょう。自分の罪深さがこんなに確かだと信じるのでしょうか。それとも、義とするキリストの助けのほうが強いと信じるのでしょうか、どちらをお信じるのですか。ヨハネの迫りはそういう迫りです。あなたは自分の罪深さを信じるのか、それとも、義とするキリストをお信じるのか。

「罪」とは、「神の戒めに反すること」です。ここでも「戒め」が出てきますけれども、「罪」とは「神の戒めに反すること」です。「十戒」に反することです。「十戒」というのは、ご存知でしょう、まあ全部言ってくださいって、今日ここでテストはいたしません(笑)。でも「第一戒」くらいはみなさん言えるでしょう。「あなたはわたしのほかに、何物をも神とするものがあってはならない。」ここで罪は一番問われるんです。「神を神としているか？」っていうことです。他のものを神としちゃいけないか？っていうことです。5
これ、大切です。言い換えればこれは、「神を最も確かで強い支配力とする」ということです。神を信じているのはそういうことでしょう。他のものよりも神さまがずっと力強いんだっていうことを信ずることです。それに比べたら、偶像なんてほんとに力を持っていないんだっていうことを知ることでしょう。神を「最も確かで力強い支配力」だとすること。しかし、私どもは問います、案外ほかの支配力を信じちゃってるんじゃないでしょうか。「どうせ自分は罪人だ」それが支配力になっちゃう。ほら見ろ見ろ、やっぱり罪を犯した、罪の支配力ってすごいなー、なんて感心しちゃったりする。自分がいつまでも罪人であるっていうことを信じちゃっている。そういう、残る罪を大きく見せる、神ならざる力があるのです。気を付けてください。小さな罪を突っきます。「お前、神の子だなんていうけど、これなあーんだ!？」それを大きく見せて、そして全部台無しにしようとするんです。みなさん、「コイン」あるでしょう？「コイン」15
取り出して太陽がどんなに燦々と照っていても、「コイン」目の前にぱっと当ててください。どうなりますか？太陽の光、「コイン」1個で全部消せるんですよ。こうする力があるんです。気を付けてください。「神さまなんか信頼に値しないよ、ほら、お前にこんな罪があるじゃないか。こんな罪があるじゃないか！だから神なんか信頼に値しないんだ」と、そうささやく力があるんです。それをヨハネは「世」と呼びます。世の力に巻き込もうとするんです。どうせ罪人だから罪を犯して当たり前じゃないか、罪と戦うこと20
なんか意味がないんだ」...そういうふうに罪を大きく見せて、我々が神を信じることを砕こうとする。そう語りかけられる時に、「私は神を神とする!」。抵抗してください。「私を義とするキリストを信じる」。私たちは擦り剥く傷をつけられることがあるかもしれません。しかし、立てるんです。いろんなところに傷を受けることがあるかもしれない、しかし、立てるんです。義の戦いをすることができるんです。なぜならば、罪に、助け主イエス・キリストがおられるから。義なるイエス・キリストがおられるから。それを25
を大胆に信じてください。

罪があまりにも我々に大きく感じられるのは何かと言うと、それは、あまりにも我々が神経質になるからです。罪が克服される姿をその神経質な中でこう描いてしまう。清らかになること、内面がもう清らかになってしまっていて、そして罪の片鱗一つも見えなくなるような姿を我々が考えると、逆に我々は罪に悩むようになります。そうでしょう？ああ、ここにもまだ罪がある、ここにもまだ罪がある、ここにもまだ罪30
がある、そう考えるようになる。それを問い詰めながら、「ああ、私はまだ罪人だ」って。ヨハネのここでの、一つの大きなチャレンジは、「兄弟を愛そう!」というチャレンジです。これはヨハネの手紙を読んだら何度でも出てきます。「兄弟を愛そう!」。でもヨハネのチャレンジの前に、ひょっとしたら我々はこうしちゃうかもしれない、ヨハネはそれも心配しているんです。「ヨハネ先生の言うチャレンジに立つには私はまだ土台が出来ていない。だって、こんな内面の罪もあるし、こんな嫌な思いもあるし、こんなわだか35
まりもあるし、内面を問えばこんなことがあるから、そりゃあ、兄弟を愛せません。まだまだ先生、待ってください。まだその戦いに出るための準備をしますから、ちょっと待ってください。」そんなことになる。しかし、ヨハネがここで考えているのはそんなことではありません。あなたにわだかまりがあっても、あなたの中に隣人に対するよからぬ思いがあっても、それを引きずりながらも、愛に生きなさい。

そうでしょう？愛というのは必ず戦いを含んでおります。恋愛ぐらいなら戦いの無い愛は描けるでしょう。みなさんも恋愛の、ねえ?(笑)、そう言う恋愛に最初から戦いがあったら困りますね。「ああ、あの人嫌いだけれどもでも好きにならなくちゃ」なんて(笑)。私は結婚しましたけれども、最初のそういう愛の戦40

いはなかったですね。もうバラ色の人生を自分は生き始めた、そう思いました。けれども、そうはいきません。愛の戦いを覚えるようになります。どうしてあの人は私が考えるように考えないのだろうと、こう(笑)思うようになる、相手もそう思っている。時々喧嘩をする。時々どころじゃない、しばしば喧嘩をするようになる、これ、結婚してからしばらく経ってから本当に二人はぶつかることが多くなった、っていうこと。

5 最初の愛っていうのは戦いが無いんですよ。我々はそれを愛だと思いやすい。感情もそこに乗り出して、もう本当にそういう曇りのない愛に生きられる、なんていうことを考えやすい。でもそれならば、それが愛だとするのならば、どうしてパウロは「愛は寛容で」と言ったのでしょうか。あのコリント書の前書の第13章のところで、愛の章のところで、「愛は何々で...」と語り始めるところでパウロが最初に言うのは「愛は寛容で」ですよ。さっき言った、感情がもう高ぶって、もう曇りのない愛を生きているのならば「寛容」なんか必要ないでしょう。何で「寛容で」っていうのでしょうか？赦せない相手がそこにいるからですよ。「愛は礼を失しない。」...礼を失しそうになる力を知っているからですよ。「愛は耐え忍ぶ。」...忍耐が切れてしまうことを知っているからです。聖書が言う愛は違うんです。感情の愛ではありません。理性の愛です。意志の愛です。感情がどうであつたって愛に生きなさい、っていう愛です。感情を引きずりながらも、あなたが愛に生きてごらんください、という愛です。

15 この頃も話題になっていますけれども、渡辺和子さん。著書がだいぶ売れていて、この間は、あの、朝のNHKの番組に出ていて、私急いで教会に行かなくちゃいけないんですけどもそこに座り込んで見ちゃって(笑)、ちょっと遅くなっちゃったこともありましたが、うれしかったですねえ。渡辺和子さん。NHKのインタビュアーの人にインタビューされながら、「神さまはね、」なんてこう言い始めちゃうわけで、「ああNHKで説教し始めた。やれ！やれ！」(笑)と思いながら見ていました。この渡辺和子さんが前に書かれた本を私読んだので、忘れられないんです。その中に、こんなことが書いてありました。「人間にとって誰も乗り越えることができないピーマン的存在がある」と、こう言うんです(笑)。和子さんは、ピーマンがどうしても好きになれないんだと(笑)、こう言うんですね。それと同じように、どうしても好きになれない人がいるというんです。ある時に、同じ修道女として修道院の中で一緒に奉仕をしている。でも、一緒に奉仕をしながら、どうしても相手のことを、まあ、合わないんです、好きになれない。もう、悩み続けるんです。「自分に愛が無いんだろうか」と、そう思って悩み続けるんです。で、ある時に、上部から辞令が出まして、その人が遠い外国の修道院に、派遣されることが決まった。和子さんはその時にほっとしたって、書くんです。でも、そこで和子さんはこう言う。「でも、私は彼女のために祈り続けている。」愛というのはそういうことなんです。感情にかまけないこと。感情にかまけず、祈りに生きることです。感情にかまけず善意に生きることです。我々は感情が大きい、感情が一番人間を支配すると思っている。

25 感情が一番正直だと思っている。しかし、感情を乗り越えることだって我々には出来るんです。

30 ヨハネは言います。「この戒めを守らない者」、これ4節、「彼を知っていると云いながらその戒めを守らない者は偽り者であって、真理はその人のうちにない」、この「戒め」っていうのは「兄弟を愛する」という戒め。この戒めを守らない者は、こうとまで言うんです。中途半端な信仰者だ、って言うんじゃないんです。「真理はその人のうちにない」。これ厳しいですねー。そういう生き方を知らない人間は信仰の何たるかをまだわきまえてないんだ、って言うんです。我々が前のめりでも愛の一步を踏み出さないうちは、我々はまだ信仰の何たるかをわきまえてない...。そうです。愛し始めることです。うちにいろいろなものを引きずりながらも、愛し始めることです。

35 私はしないんですけども、「サーフィン」をする人、(笑)いますか？ 「サーフィン」ってのは四国の瀬戸内じゃ、あれ、波が弱すぎてちょっとサーフィンにならない。私、沖縄に赴任していた時に、沖縄はサーフィンが有名などころがありますね。サーフィンするのを見ている。そうすると、あれは最初に波が来て、波に乗るんですけども、あの、ポーっとして、波が来た、さあ立って波に乗ろう、ってのじゃ乗

40

れないんですね。どうやって波に乗るか知ってますか？ 「パドリング」ってのも、こおーやって波に向かって同じ方向に少おーし進めるんです、人間の力で。そうしたらあの大きな波がサーフィンを押すようになって、波に乗れるんです。そうしなけりゃ波に乗れないんです。自分が漕ぎ出さなければ波に乗ることは出来ない、波の力は大きいですよ。人間の力とは全く違う力です。しかし、その、波に乗るためには人間がまず漕ぎ出さなくちゃいけない。私どもは、この、愛の大きな波に乗るためには私どもの貧しいけれどもしかしその愛を総動員して、漕ぎ出すんです。意志かもしれません。理性かもしれません。そうして、相手のために漕ぎ出してみるんです。「愛せるから愛してごらん」と、神さまが私どもに言われるのです。「戒め」というのはそういうものです。「愛せないでしょう、だから、あなた、愛せなくちゃダメ！」って言うんじゃないんです。「もう愛せるようにしてあげているから、あなたが愛してごらん。あなたの知らない、本当の愛の物語が始まるから、さあ、一步踏み出して、愛を...」。

「八木重吉」という詩人を知ってらっしゃるでしょうか。彼は、私が今住んでるところのすぐ近くで生まれて活動した——今でも仏教の人たちまで一緒になってその亡くなった日を記念するっていうようなある意味では非常に大きな影響を与えた——日本のキリスト者の詩人です。この八木重吉という人が、いろんな詩を遺していますけれども、こういう詩、私この詩大好きですねー、こういう詩を遺しているんです。

ちょっと読んでみますが、みなさんもご存知の方いらっしゃるでしょう。

愛のことばを言おう

深くして醜きは、浅くして美しきに及ばない

次第に深く導いていただく

まずひとつ、愛のことばを言いきってみよう

面白いでしょ？ 「深くして醜きは、浅くして美しきには及ばない」とこう言うんです。わかります？ 「深くして醜き」というのは自分の内面の深い、深いところにある醜さに、こう、にらめっこするような、そういう人間の態度です。「だってこんなことがあってこんなことがあって、自分はなんて醜い人間なの？」っていう思いに捕えられちゃうこと。「深くして醜きは、浅くして美しきに及ばない」。「浅くして美しき」って面白いですね、「浅くして」って、浅いのが良いんだろうかと思うけど、八木重吉そう言うんです、「浅くして美しき」...「浅い」ってのは我々の表の行動に出るってことでしょうか？表に出る美しさでしょう。パウロに言わせれば「礼を失しない」ということでしょうか。「礼儀に生きる」ということでしょうか。まずひとつの愛のことばを言いきってみよう。言いきってみる。愛のことばを言いきってみる。最初に、さっきのパドリングの話じゃありませんけれども、まずひとつの愛のことばを言いきってみよう。その、我々の愛の行動を神がおとらえになる。神がおとらえになる。「偽善」とは違います。「偽善」とは違って、——何が違うか？——祈りをもっているからです。「神さま、この行いをとらえてください。この小さな貧しい、しかし、ささげる愛を、主よ、とらえてください。」そう言いながらささげるわざを神さまは受け止めてくださる。「愛せるから、愛してごらん。」そう言われるのです。

ヨハネは言います。「私が与えるのは、書き送るのは、新しい戒めなんかじゃない、古い戒めだ」。「十戒」のことです。主イエスはきちんとそれを二つだとまとめなさいました。「神を愛する」とこと、「隣人を愛すること」。ここはそのことを言っています。「古い戒め」、過ぎ去らない。「隣人を愛しなさい」ということです。この「古い戒め」、隣人を愛すること、なぜならば、なんでこれをもういっぺん書き送るかっていうと、ここ以外に人間の答えも幸せもないんですよ。違うものを持って来てね、愛さないのも「答え」、隣人を愛さないのも「答え」、いがみ合って生きるのも「答え」。生きてごらんなさい。そんなこと「答え」になんかなりっこない。ここ以外に、隣人を愛す以外に、神を愛し隣人を愛す以外に、人間の答えも幸せもありません。「愛のなさに座り込んで、人を愛せない自分だけ、こんな自分だから神に愛されている」と言いながら人を傷つけ続けている...。ああ、ひょっとしたらあるかもしれません。「自分は罪人だねー」

なんて泣きながら、「もう仕方がない、また悪いこと言っちゃった、また愛せなかった。でも、イエスさまが愛してくださっているからいいか」なんて。こんなこと答えになんかなりません。愛に生きてみるのです。

しかも、ヨハネは言います、8節、「しかも『新しい戒め』をあなたがたに書き送る」。新しい戒め。「そして、それは、彼にとっても、あなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。」

新しい戒めなんだ、古いけれども「新しい戒め」。どういうことかという、「古い戒め」は正しいけれども人を正しくする力までではないんです。「古い戒め」は、ここではパウロと重なるかもしれませんが、「古い戒め」は人と罪を明るみに出してそれで終わりなんです。裁いて終わりなんです。しかし、ここでヨハネは言う。「新しい戒め」だ、それは「真理」だ。「真理」ってのは「神のいのちの動きを宿すもの」って言ったらいいいでしょう。「戒め」自身がいのちを持ち始める。「戒め」自身が動き始める。それを「まことの光がすでに輝いている」。弟子たちと主イエスとの出会いを考えたらいいでしょう。弟子たちは「戒め」が形を取って光となって自分の目の前に生き始めたのを見たんです、「あなたも愛する」と。とくにペテロを考えたらいいでしょう。三度も主を否んで、人間の関係だったら三度目の正直でおしまいですよ。けれども、わざわざそのペテロを訪ね出して、「わたしを愛するか、わたしを愛するか」そう問いながら、主イエスはペテロの前に、隣人を愛するその姿を、ご自分のお姿で描き出されたのです。そうした時に、この戒めは違ったんです、裁く戒めじゃない、もう「戒め」自身がぼかぼかと熱を持つようにして、「ああ、愛を受けたらこんなにうれしいんだ！」隣人を愛するという生き方に接したら、こんなにうれしいんだということを主イエスが始めてくださった、それが、「新しい戒め」。「まことの光がすでに輝いている」。光となって、人間の罪深さを温めきってしまう。愛のなさを暖めきってしまう、そういう光を、主イエスご自身がそこに描き出してください。「新しい戒め」です。そして、彼が歩いたようにあなたがたも歩きなさい、大きな大きな太陽にはなれないけれども、あなたは「たき火」ぐらいにはなれるでしょう？...どうぞ、教会の中であなたがたが「たき火」になってほしい。あなたがたが、ささやかでも愛を描き出してほしい。当たって「ああ、暖かい！」と思うようなその「火」になってほしい、「光」になってほしい、「明かり」になってほしい。それだけの光を我々は受けたんです。どれほどの愛かっていうと、弟子たちの前に出て来た時に、どうなさいました？ その手を、こう、かざして、入ってこられた。「安かれ」って入ってこられた。あなたがたのために「死」すら乗り越えた、罪深さすら乗り越えた。そのようにして、隣人を愛する愛を主イエスは与えてくださった。その光を受けながら、「愛そうとしない」ってことはないでしょう！この主イエスの光に暖められないはずはないでしょう！

私は、沖縄で、6年間牧会をいたしました。沖縄の経験の中で、いろんなことが思い出の中に残っておりますけれども。沖縄ってどうも、本土とずいぶん違うっていう感覚が強いんですよね？沖縄って、いったい何が違うのですかって問われた時に、それは、やっぱ風土が違います。風土が何によって生まれてきているのかって言うと、それは、あの「日差し」でしょう。日差しの違いうってのは、そのところの風土を決めていく、その動植物もそうですし、あるいは人間の営みもそうですよ。日差しが決めていくってところがあるでしょう。沖縄の日差しは強いですね。何が違うって「日差し」が一番違う。

私は、沖縄にいた時には、こっちに帰ってくるとほとんどしなくなりましたが、「サングラス」をしました。「サングラス」、こっちでは何か気取って嫌な感じでしょう。沖縄は、実際に眼が痛くなっちゃうんです。眼の病気が起こります。何とかって病気が起こっちゃう。そのことが報じられて、沖縄ではよくサングラスをかけるようになりましたけれども、私も沖縄にいる時、外に出る時は出来るだけサングラスをかけるようにして眼を護っていました。そのぐらい日差しが違います。ある時にこんなことがあったんです。教会の上に——沖縄ははよく昔、水不足がありましたから——貯水タンクが必ず付いているんです。教会の上にある貯水タンクに点検の人が来て、「これ、上の貯水タンクの蓋がぼろぼろになっていま

すよ。これ、替えなくちゃいけないですよ。」って言われたんです。その貯水タンクの蓋は、何か、どっか、台風か何かで飛んじやったかして、ポリバケツか何かの蓋をこう括りつけたんですけれども、もうそれが、沖縄の強い日差しに照らされて、そして、どうなってる？ ぼろぼろになってるんです。その樹脂の油っ気がみーんな飛んでしまって、その光にさらされてぼろぼろになってしまう。光はものをぼろぼろにしちやうんです。そうです。まことの光は強いんです。まことの光は罪の油っ気を抜いていきます。まことの光は我々の罪をぼろぼろにしてしまう。まことの罪は、いや、まことの光は我々の罪を腑抜けにしてしまう。罪は力なくなっていく。我々の敵意や憎しみをすら、しまいにはぼろぼろにしてしまう、それだけの光をみなさんが今、受けているんです。

10 信仰を神にささげてください。もう一度、問いたいと思います。みなさんは自分の罪深さ、罪の強さを信じるのでしょうか、それとも、罪からの助け主イエス・キリストの強さを信じておられるのでしょうか。どうぞ、今、心の中で、信仰を神にささげていただきたい。信仰をキリストにささげていただきたい。すでに、ここに光が照っている。まことの光が照っていて、我々の罪をぼろぼろにしてしまうような、まことの光の中に我々は立っている。そのことをぜひ、知っていただきたいのです。祈りをいたしましょう。

15 (祈り)

父なる御神。

目を内側に向けて、自分の罪深さばかり見てしまうような弱さがあるのならば、我々の信仰を揺り覚ましてください、内を見るのをやめよと。助け主がいる、主イエスがおられるじゃないかと、そのように、我々を信仰に引き戻してください。確かに罪を抱えながら生きています。しかし、その罪の中から真っ直ぐに顔を神に向けて、神の光に晒されながら、愛に生きることが出来ますように。赦しに生きることが出来ますように。和解に生きることが出来ますように。私どもを導いてください。主イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン。